山頭火著作集 II

この道をゆく

つきぬ愛欲と求道の谷間にさすらいの
日々を送りながら無限の豊饒に飛翔し
てゆく孤独な魂の美と憂愁の軌跡——

山頭火著作集 II

この道をゆく

大山澄太

岡山県に生まる（1899～1994）。逓信省事務官，内閣情報局満州郵政総局嘱託。戦後，個人雑誌「大耕」主宰。愛媛県社会教育委員。愛媛県教育文化賞を受く。
俳禅修業40年。「日本の味」「般若心経の話」等，著書多数あり。山頭火の顕彰に努む。

昭和43年9月15日第1刷発行 ©
平成8年2月25日第21刷発行

編者　大山澄太
発行者　小島米雄
印刷所　井上印刷

発行所　〒162
東京都新宿区市谷田町 2—31
電話東京（3267）7181（代表）
振替・00140-7-69107
株式会社 潮文社

落丁本・乱丁本はおとりかえします

（越後堂製本）

山頭火著作集 II

この道をゆく

つきぬ愛欲と求道の谷間にさすらいの
日々を送りながら無限の豊饒に飛翔し
てゆく孤独な魂の美と憂愁の軌跡——

ISBN4-8063-0082-9 C0295 P780E

潮文社　定価780円（本体757円）

原书缺页

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

原书缺页

山頭火著作集 (二)

この道をゆく

大山澄太編

目次

行乞記……9
東行記……73
三八九日記……109
木村緑平宛ハガキと手紙……155
種田山頭火年譜……317

行乞記　（山口県小郡時代）

一鉢千家飯

□春風の　鉢の子一つ
□秋風の　鉄鉢を持つ

雲の如く行き
水の如く歩み
風の如く去る

一切空　　山頭火

五月十三日（昭和八年室積行乞）

まだ明けないけれど起きる、まづ日暦を今日の一枚めくり捨てゝから空模様を見る、有明月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

の明るさが好晴を保証してゐる。
今日はいよ〳〵行乞の旅へ旅立つ日だ。
いろんな事に手間取って出かけるとき六時のサイレン。汽車賃が足らないから、幸にして、或は不幸にして歩く外ない。
長沢の池はよかった。松並木もよかった。
大道——プチブル生活のみじめさをおもいだす。
それから——それから二十年経過！
佐波川の瀬もかはってゐた。
青葉がくれの伯母の家、病める伯母を見舞ふことも出来ない甥は呪はれてあれ。
私を見つめてゐた子供が溝に落ちた、あぶない。
暑い風景である。
おもひでははてしなくつづく。
宮市……うぶすなのお天神様！
肖像画家S夫妻に出くわした、此節は懐工合よろしいらしく、セル、紋付、そして人絹！
富海で、久しぶりに海のよさをきく。

大道、宮市、富海――あれこれとおもいでは切れないテープのやうだよ。
お宮の松風の中で昼食、一杯やりたいな。
転身の一路がほしい。
富海行乞、戸田行乞、二時間あまり。
さりとは、さりとは、行乞はつらいね！
S君の家はとりこぼされてゐた。S君よ、なげくな、しっかりやってくれ。
自動車、それは乗客には、そして歩くものにはまさに外道車！　旧道はよろしいかな、山の色がうつくしくて、水がうまくて。
今、電話がかゝってゐるから、行乞の声をやめてくれといふ家もあった。笑止とはこれ。
一銭から一銭、一握の米から一握の米。
暮れて徳山へついた。
徳山は伸びゆく街だ。白船居では例のごとし、酒、飯、そしてまた酒。
雑草句会に雑草のハツラツ味がないのはさみしかった。若人、女性を見分したのは白船老のおかげ、感謝、感謝。
白船居の夢はおだやかだ、おだやかでなければならない。

白船老いたり、たしかに老いたり。
けふいちにちはあるきつゞけた、十里強、行乞はつらいね。
可愛い子には遍路をさせる。
行乞は他を知り同時に自を知る。

月見草もおもいでの花をひらき
春まつりの赤いゆもじで乳母車押してきた
春もゆくふるさとの街を通りぬける
はぎとる芝生が春の草
かきつばた咲かしてながれる水のあふれる
五月晴、お地蔵さんの首があたらしい
松蟬があたまのうへで波音をまつ
たちよればしづくする若葉
夏山のトンネルからなんとながいながい汽車
踏切も三角畑の花ざかり

竹の子みんな竹にして住んでゐる
はるかに墓が見える椎の若葉も
松並木ゆくほどに朝の太陽
こゝでやすまう月見草ひらいてゐる（大道）
音もなつかしいながれをわたる（佐波川）
ふるさとの山はかすんでかさなって（宮市）
水にそうてふるさとをはなれた
誰もゐない蕗の葉になっている
線路がひかるヤレコノドッコイシ〻
春はゆく鉢の子持ってどこまでも
こゝは水の澄むところ藤の咲くところ
埃まみれで芽ぶいてゐる

五月十四日

とろ〳〵まどろんですぐ起きた、そして街から浜を歩いた。

晴は晴だが、時々曇、雨が近いことはたしかだ。朝から酒、朝酒はうまいこともうまいがこたえることもこたえる。漣月老を久しぶりに訪ねて、勢のよい君を祝し喜んだ。

九時近くなって出立、櫛ケ浜行乞、それから下松、虹ケ浜、そして室積——六里の道が六十里にも感じられた、何しろ過飲と不眠とのために、さすがの私も今日ばかりは弱ってしまった。

米はあまり重いから、途中の安宿に預けたが、それだけでも大いに助かった。

室積は普賢市などで、帰る人々がぞろ〳〵ぞろ〳〵、その場を自動車、自動車、自動車、何もかも埃まみれだ。多少脚気の気味がある、旅で死んでは困る、私は困らないけれど、周囲の人々が困るから。

暮れるまゝに、やっとせい二居に着いた。学校まで行かないうちに、或る人に偶然教へられて尋ねあてたのはよかった。

熱い風呂にはいってさっぱりした、それから酒となったのは自然で必然だ、おそくまで酒、蛸、酒、鮪。

やはらかな寝床、やすらかな睡眠。

せい二さんに尊敬と感謝とをさゝげる。

今日は一句もなかった。昨日朝十句あった反動かも知れない、あるも本当、ないも本当だ。

とにかくこゝろよう酔ってぐっすり眠れた。こゝから××まで何里ありませうかと訊ねたら、

おぢいさんは、三里近い

おばあさんは、一里半あまり

と教へてくれたが、おぢいさんは全然落第、おばあさんはまさに及第だった、まあ二里位といふところであったが、道程を訊ねるとその教へ方によってその人の智能性情がよく解る、それはメンタルテストといってもよいほどに。

今日の行乞所得

米　一升四合　　銭　九銭也

五月十五日

曇、とう〳〵雨になった、半月ぶりの雨だらう、室積の人々には、せっかくの最後の書入日が駄目になって気の毒だが、天を怨む訳もない。

私はこゝへきてゐてよかった、安心して今日が暮らせる！

普賢様へ詣でる、女子師範校を通りぬけて大師堂へ詣でる。

皷ケ浦はおだやかに千鳥が啼いてゐた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton